

贋作作りの夢描く

文人の
武蔵野

松本清張(1909~92年)は、「笛壺」「声」「捜査團外の条件」と、昭和30年から毎年1作品、武蔵野を舞台にした小説を世に出しました。が、続く昭和33年にも「武蔵野もの」を発表します。「真贋の森」(「別冊文藝春秋」昭和33年6月)がそれです。犯行を実行する者の語りで行きますので、謎解きを楽しむタイプのミステリ作品ではありません。学問芸術の世界の権威を支える虚偽の実態を世に晒そうとする迫力あるプロシエクトと、それを推進す

松本清張 ④



国分寺駅から出る西武国分寺線の電車

る「市井の老学徒」の義憤やルサンチマンのリアリティーが読みどころです。

作中に描かれているように、貴重な古画が発見されて東京帝国大学の美学美術史学研究室に持ち込まれたとしても、正確な鑑定が可能とは限りません。主任教授を上回る鑑識眼を育みながらアカデミ

ズムから締め出された者もいることでしょう。

真贋を見極める眼をもつ「市井の老学徒」が、ある時秘密のチームを組んで贋作をプロデュースすることになり、贋作の才のある画家を見いだします。その画家を匿い、江戸時代の文人画家・浦上玉堂の画風を仕込むのですが、時間をかけて真の贋作者を養成する場所として選ばれたのが武蔵野でした。

「中央線の国分寺駅から岐れた支線に乗って三つ目に降りた所」にある「葦葺きの百姓家で」、「画を描くのに採光の具合もよく、辺りは「武蔵野の雑木林が、畑に侵蝕されながら、また諸方に立ち罩めてい」ました。武蔵野で完成した贋作は、美学者たちの眼を欺き本物と鑑定されませんが、贋作画家の自負から生じた発言により計画は頓挫。夢は武蔵野で紡がれ、奇妙な

達成感を残して破れます。

(武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍)

おすすめの1冊

「松本清張ジャンル別作品集3 美術ミステリ」

全集未収録の2篇を含めた4作が松本清張の代表的な「美術ミステリ」として収録されています。清張自身、学歴はありませんが美術史への造詣が深く、自ら絵筆をとっても一流の職人(デザイナー)でした。日本における本格的な美術ミステリの草分けだと言えます。



松本清張
ジャンル別作品集3
美術ミステリ

(双葉文庫)